No. 6 0 3

一、盛　夏

盛夏ともなれば、海や山に涼をもとめてどっと人がくり出します。

湘南海岸も二五〇万人が押しかけ大変な混雑ぶり。浜辺はコウラボシの若者達でいっぱいです。

一方東京のあるお炙院。夏場を乗り切るにはお炙が一番とか。この療法効果あってか連日満員の盛況。心頭滅却すれば火もまた涼しといった所か。とはいえなかなか大変のようです。

一、招かれた炭鉱遺児

——神奈川・東京

今年にはいってから炭鉱災害は夕張、伊王島山野とあいついで起り、尊い多くの人命を失いました。

政府はこれら炭鉱災害による殉職者の遺児をなぐさめ、はげまそうと、このほど東京へ招待。

北海道、九州からの子供たちは不幸にもめげず、夏休みの招待旅行を楽しく過しました。

一、あいつぐ海の惨事

八月一日午前十時十五分大阪港安治川内港の岩壁近くで、日立造船のひき船「芦屋丸」が、港めぐりの遊覧船「やそしま丸」に激突、乗っていた和歌山県橋本市の菖浦谷子ども会の児童と母親ら五十五人のうち二十人が水死。

「やそしま丸」は手を伸ばせばすぐ岩壁に届きそうな海底に一瞬にして沈んだのです。

捜査当局では「芦屋丸」の操船ミスによるものとの見方をしています。

その夜、沈没した「やそしま丸」の引上げを開始、犠牲者の多くが子供と付添の母親、そして泳げない老人であったことは、多くの人の涙をさそいました。

一方、翌二日午前二時ごろ濃霧の伊豆大島付近の海上で、アメリカの貨物船「アリゾナ号」と明和海運所属のタンカー「明興丸」が衝突。

一人が救助されただけで、残る十七名は絶望となったのです。

瞬時にして、二つに切断され転覆、だが事故の確認は、町田二等航海士が救助された十時間も後のこと。

その頃「アリゾナ号」はマニラに向って航行中、第三管区海上保安本部は、異例といわれる外国船に対し日本引返しを要求。

船尾をえぐり取られた船体は、そのまま引かれ館山港に入港、潜水夫による遺体捜索作業が始められました。

一人、また一人と変りはてた船員が引き上げられたのです。

相次いで起った二つの事故を教訓として、海上安全の対策が一日も早く望まれています。